

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：34513

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00599

研究課題名(和文)「視点」にかかわる言語現象と理論言語学

研究課題名(英文) Theoretical linguistics and linguistic phenomena related with Point of View

研究代表者

西垣内 泰介 (Nishigauchi, Taisuke)

神戸松蔭女子学院大学・文学部・教授

研究者番号：40164545

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：「視点」にかかわる様々な表現を含む構文について、理論言語学の観点からその性質を言語の統語構造との関係で明らかにし、諸言語でかなり共通した性質が見られることを示していく。「証拠性」を含む「意識」(awareness) やエンパシー(「共感」empathy) など、意味的な概念が日本語および世界の多様な言語の統語構造の中にエンコードされると考える研究の理論的・経験的可能性を示し、関連する言語現象には「一致」や移動操作およびそれらに対する制約など統語理論で用いられてきた概念が積極的に関与することを示していく。また関与する言語現象について形式化された意味論の分析を行う。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来 意味や言語使用の観点からのみ考察されてきた「視点」にかかわる様々な表現およびそれらを含む構文について、理論言語学の観点からその性質を言語の統語構造との関係で明らかにし、日本語および複数の言語でかなり共通した性質が見られることを示している。意味的な観点のみから考えられてきた「視点」に関わる構造的実体が存在することを指摘し、再帰代名詞(日本語では「自分」)など「視点」に関わる言語現象や主観的な評価を表す言語表現などの振る舞いが統語的制約に従っていることを示し、これまで中国語で注目されてきた「阻止効果」についてそれが日本語にも存在することなどを示している。

研究成果の概要(英文)：This is a theoretical research about linguistic phenomena involving Point-of-View and modality with reference to the syntactic structure, attempting to show some significant similarities among natural languages. This research explores theoretical and empirical consequences of theoretical approaches whose claim entails that such notions as "awareness" and "empathy" are encoded in the syntactic structures of Japanese and other languages of the world. It is shown that in the analysis of the relevant linguistic phenomena such theoretical notions as "agreement" and various constraints on movement operations which have been shown to be viable in analyses of syntactic structures. The considerations involving syntactic apparatuses will be congenial to formalized semantic theory.

研究分野：理論言語学, 対照言語学

キーワード：視点 モダリティ 視点投射 再帰代名詞 評価表現 阻止効果 エンパシー

様式 C-19、F-19-1 (共通)

## 1 研究開始当初の背景

本研究で対象とする「視点表現」(Point-of-View sensitive expressions)とは、Bylinina, McCready and Sudo (2014), 田窪 (2010) などで列挙されている次のような言語表現である。

### (1) 視点表現

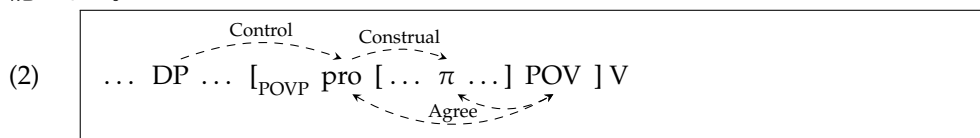
- ダイクシスに関わる表現
  - 相対的位置・関係を表す表現: 右、左、前、後ろ、など; 同僚、先輩、家族、外国人 など
  - 直示表現: 私、きみ、こ・そ・あ系列 など
- 視点に依存する照応形: 「自分」
- 主観的評価を表す表現
  - 不確定な評価表現: 大きい、高い、広い、美しい、優秀な など
  - 個人的見解を表す表現: おもしろい、楽しい、おいしい、不可解 など
- 証拠性、評価などを表す (助) 動詞: ~そうだ、~てしまう など
- 呼称・敬称: 田中さん、田中くん、田中先生 など; 慌て者 など

これらの表現は、従来意味論や語用論などの立場から考察されていたものである。

## 2 研究の目的

研究代表者は、Nishigauchi (2014a), 西垣内 (2014b) で「証拠性」(evidentiality) 「評価」(evaluation) 「伝聞」(hearsay) などの意味のないし語用論的な意味概念をエンコードする統語範疇が節を構成する要素として存在すると考える Speas (2004) に従って、これらのモーダル要素はそれぞれ個別の投射を形成し、言語によってはこれらの (総称的な呼び名としての) 視点投射 (POV projection) が多層構造をなすと考え、そのような理論的・分析的枠組みで主に日本語の「自分」の長距離束縛と呼ばれる現象に関わるさまざまな現象を考察してきた。

西垣内 (2014b) では、「一致」(Agreement) という概念を積極的に用いて視点現象の分析を進めている。この分析では、「自分」は視点表現の一種と考え、視点投射主要部と POV 素性を共有することで「一致」(Agreement) の関係を持つと考える。さらに視点投射指定部に現れる要素 (視点保持者) も視点投射主要部と「一致」(Spec-Head Agreement) の関係を持つ。POV 指定部に pro があれば、これが文中の名詞句によるコントロールを受け、「自分」の「長距離束縛」といわれるものが可能となる。



本研究では、この考えをさらにすすめ、(2) の  $\pi$  の位置に (1) に列挙した視点表現が現れると考える。「自分」は POV 投射のいずれとも「一致」の関係を持てるが、(1) の「自分」以外の各項目は POV 投射のいずれかと選択的に「一致」する。

☞研究の目的 1 (1) の視点表現のそれぞれについて、どの視点投射と「一致」の関係を持つかを明らかにする。

これによって、視点表現の性質を統語構造との関連で従来にない精密な特徴づけをするという意義がある。

次にダイクシスの問題がある。従来の考察では、ダイクシスに関わる要素は一括して考えられており、(1) の「相対的位置・関係を表す」要素と「直示」要素との間の差異について具体的な考察は行われていない。しかし、「相対的位置・関係を表す」表現は Nishigauchi (2014a), 西垣内 (2014b) で示したように、意識を持たない、「基準」の役割を持つ項を「自分」の先行詞とすることを可能にする働きがある。

(3) {\*ヨシ子が/同僚たちが}自分<sub>i</sub>をけなしている間、タカシ<sub>i</sub>はぐっすり眠っていた。他方、「直示」表現は「阻止効果」を引き起こす。

(4) \*{僕が/こいつ<sub>i</sub>が}自分<sub>i</sub>を呼びにきたとき、タカシ<sub>i</sub>はぐっすり眠っていた。

☞研究の目的2 「相対的」ダイクシスと「直示」ダイクシスの違いを統語論・意味論の両方について明らかにする。

この問題はむしろ形式意味論で研究が進んでいる分野であり、分担者との協力で進めていく。さらにこの問題から次の問題につながっていく。

☞研究の目的3 「阻止効果」の研究を、特に中国語との関係で進める。

「阻止効果」については、西垣内 (2014b) で詳細な考察と分析を行ったが、中国語との対比について考察を続けることは2つの言語の微細な差異 (micro-variation) を追究することにつながる。

また、英語の再帰照応形について、視点に関連して長距離束縛の性質を示すという Zribi-Hertz (1989) の研究が知られているが、近年本研究と近い立場でこの問題を取り上げる、Charnavel and Zlogar (2015) のような研究がある。また、Sundaresan (2016) は本研究と同じ方法を用いてタミル語の再帰表現についての分析を行っている。

☞研究の目的4 本研究の方法で、中国語、英語、タミル語など複数の言語での視点現象を検証していく。

### 3 研究の方法

☞研究の目的1 (1)の視点表現のそれぞれについて、どの視点投射と「一致」の関係を持つかを明らかにする。

基本的には代表者の現行の研究をそのまま推し進めることである。西垣内 (2014b) で Sells (1987) の分析を視点投射を前提とする分析で再構築する研究を行っているが、視点表現を視点投射との「一致」の観点から見ることは西垣内 (2014b) の延長上にある研究である。

☞研究の目的2 「相対的」ダイクシスと「直示」ダイクシスの違いを統語論・意味論の両方について明らかにする。

上述したように、ダイクシスについては形式意味論で研究が進んでおり、研究分担者との緊密な議論によって進めていく。

☞研究の目的3 「阻止効果」の研究を、特に中国語との関係で進める。

日本語の「阻止効果」については、西垣内 (2014b) で「有意識条件」が成り立たない、先行詞が「基準」である時に起こる現象であり、複数のダイクシス投射に異なる指標が与えられる時に起こる現象であるという分析を行った。また、進行中の研究の中で、中国語では「有意識条件」が成り立たない環境では再帰形 ziji の束縛はできないという観点から、中国語では視点投射の中でどこでも異なる指標が与えられると「阻止効果」が起こるといふ分析を提出している。

しかし、Wang and Pan (2014) など中国語でも「有意識条件」が成り立たない環境でも再帰形 ziji の束縛は可能であるという見解が出されており、さらなる検討が必要である。

この研究は理論言語学の訓練を受けた中国語話者の協力が不可欠である。本研究期間中に米国ないし中国（香港）に研究出張を行い、中国語話者である研究者と知見の交換を行う。

☞研究の目的4 本研究の方法で、中国語、英語、タミル語など複数の言語での視点現象を検証していく。

英語での関与する現象は、心理表現を豊富に含む文学作品などで観察することが可能である。Gutenberg などのデータベースを用いて興味深いデータを得られることはこれまでにパイロット調査を行って認識している。

## 4 研究の成果

### 「理由」「原因」と視点現象

この研究では「XがYの理由/原因だ。= Yの理由/原因はXだ。」のような「指定文」の「視点」に関わる現象について統語的な観点から考察した。「理由」を含む場合、次のような「視点」に関わる特性が見られる。(i)Xが「視点」(POV)に関わる表現を含む。(ii)Yが「視点保持者」(POV-holder)を含む(overtly or covertly)。(1)「大学の不可解な人事が鈴木教授の辞職の理由/原因だ。」の「理由」を含む文の「不可解」は鈴木教授の視点を表すが、「原因」を含む場合は客観的(話者の)評価を表す。このような現象について、「指定文」の構造と「視点投射」の間の構造的な関係を中心に考察を行った。

「理由」「原因」の対比については当初の計画に含まれていたが、具体的な成果が得られたと考えている。本研究では日本語の感覚・感情や欲求など、いわゆる直接的経験を表す表現について、視点投射の構造とそれに伴う指標付与の観点から考察した。これらの文は主節に認識投射が現れる構造に関連付けられる。より具体的には、「認識投射」の中でも「発話行為」Speech Actに関連する投射が関与する可能性にもとづく考察をすすめた。ここから当初の研究計画では視野に入っていなかった「自由間接話法」Free Indirect Speechについて、視点投射の構造に関連付けた分析が可能である見通しが明らかになっている。更にこの観点から「かも知れない」などのモーダル表現を含む構文について視点投射との関連で考察できる見通しが生まれている。

理由を表す構文における視点現象の研究が進展した。2018年に *cause, reason* を主要部に持つ指定文における視点現象についての研究を Stuttgart で発表した。が、*because* 節を含む理由構文における視点現象の考察を進めている。

2020年度は、チェコ共和国で行われる Olinco (Olomouc Linguistics Colloquium) で英語の「理由」に関わる構文に見られる視点現象について発表が決定しており、発表を行う予定だったが、コロナ禍の影響で大会が延期となり、発表することができなかった。

この論文では Charnavelle (2019, NLLT) で扱われている *because* を含む理由構文だけではなく、*the cause* を主要部に持つ指定文にも観察を広げ、単一の演算子の存在を仮定する Charnavelle (2019, NLLT) の分析では捉えられない現象を、証拠性、評価、ダイクシスなどに関わる複数の視点投射を仮定し、それぞれの指定部に現れる代名詞要素のコントローラが選択的に存在することで説明するという分析を提案している。従来の研究ではモダリティの視点保持者は話者に限定されるというものであったが、Charnavelle の分析では文中の登場人物が視点保持者の解釈を得ることが可能である現象が指摘されているが、本分析ではモダリティの視点保持者は「自由間接話法」(free indirect speech) の視点保持者を決定するメカニズムと同一のものによって決定できる可能性を示している。これは複数の種類を持つ視点保持者を選択的に決定する理論的枠組みの優位性を示すものであると考えられる。

また、この考察は、日本語の再帰表現「自分」の長距離束縛に関連するのと本質的に同一のメカニズムが英語の再帰表現 *himself, herself* などの長距離束縛(と見える)現象にも有効であることを示すものである。このように、本研究ではモダリティの視点保持者についての研究が進展し、さらに「自由間接話法」との関連性についても同一のメカニズムで分析が可能である見通しができた。

### 主観を表す表現と視点現象

日本語の感覚・感情や欲求など、いわゆる直接的経験を表す表現について、視点投射の構造とそれに伴う指標付与の観点から考察した。これらの文は主節に認識投射が現れる構造に関連付けられる。通常は認識投射のみが独立して節を成り立たせることはなく、証拠性投射、発話行為投射が現れ、その指定部に、デフォルトでは話者によるコントロールをうける *pro* が存在する。Kuroda 1973 の云う「(非)報告体」は、認識投射の上位にある発話行為投射の指定部にある *pro* の指示が談話トピックによって決定される時に見られる現象である。この観点から、関連する構文を含む阻止効果の

現象を考察した。

#### 「地図をたよりに」構文に関連して

多様な構文に見られる「自分」や主観性を表す言語表現のふるまいに関して「視点」に関わる統語範疇(「視点」投射)が関与していることを示すことが本研究の一次的な目的であり、これまで「指定文」「潜伏疑問」「XをYに」構文などに関連して、それぞれまとまった業績をあげている。

「地図をたよりに(目的地にたどりつく)」のような、「付帯条件」を表すとされる付加表現について新しい提案をする論文を『日本語文法』19(1)に発表し、そこで扱った問題のより詳細な議論を紀要論文として発表した。「時」の解釈に関連する語彙意味論の問題を提起した。

西垣内(2016)によって提案された、2項をとる特定の構造を持った名詞句(「関数名詞句」)から「指定文」を派生する分析方法を用いて、その統語構造と統語的派生を提案した。その観察と分析に基づいて、「XをYに」が「XをYにして」とはまったく異なる特性を持つことを示した。この論文の補遺として、大学の紀要(TALKS 22)にこの構文の詳細な考察を提示した。代名詞束縛、量化表現の相対スコープ、「量化詞分離」の現象に基づく「構造的連結性」の議論を提示し、「時」に関する解釈など、統語論分析だけでは捉えられない意味的な要因についての議論を行い、西垣内(2019)で主張している「XをYに」と「XをYにして」は構造的に違うものだという議論に、主に「時」の解釈に関連した議論を追加した。

#### 「潜伏疑問」に関連して

「潜伏疑問」(concealed questions)についての研究が大きく進展した。英語の「潜伏疑問」についての論文がチェコ共和国の Proceedings of Olinco 2018 に査読の上掲載されたが、この中で「視点」およびロゴフォリック現象に関連して構造的連結性の問題を論じた。

日本言語学会機関誌『言語研究』157に「潜伏疑問」の構造と派生」が掲載された。これは2016年に『言語研究』151に掲載された「指定文」および関連する構文の構造と派生」で提案した分析の枠組みを「潜伏疑問」の分析に拡大したものである。「指定文」については上記「指定文」および関連する構文の構造と派生」以降に気づいたいくつかのこの構文の特性と本質についての考察および分析が大幅に進展した。

#### 「指定文」に関連して

この研究期間を通じて「指定文」の構造と意味についての研究を進めた。「指定文」の焦点要素は「識別子」であり、「リスト項目」の(潜在的)集合をなすものであるという従来着目されていない特性についての考察を進めた。最終年には研究資金を活用して米国で成果の発表を行った。

### 参考文献

- Bylinina, Lisa, Eric McCready and Yasutada Sudo (2014) The landscape of perspective shifting. Conference handout, Symposium on Pronouns in Embedded Contexts at the Syntax-Semantics Interface, Tübingen.
- Charnavel, Isabelle Carole and Christina Diane Zlogar (2015) English reflexive logophors. *Chicago Linguistic Society* 51.
- 久野暉 (1978) 『談話の文法』大修館, 東京.
- Nishigauchi, Taisuke (2014a) Reflexive binding: Awareness and empathy from a syntactic point of view. *Journal of East Asian Linguistics* 23, 157–206, 5.
- 西垣内泰介 (2014b) 「エンパシーと阻止効果」『言語研究』146: 109-133.
- Sells, Peter (1987) Aspects of Logophoricity. *Linguistic Inquiry* 18, 445-479.
- Speas, Margaret (2004) Evidentiality, logophoricity and the syntactic representation of pragmatic features. *Lingua* 114.3, 255-276.
- Sundaresan, Sandhya (2016) Perspective is syntactic: evidence from anaphora.
- 田窪行則 (2010) 『日本語の構造—推論と知識管理—』東京: くろしお出版.
- Wang, Yingying and Haihua Pan (2014) A note on the non-de se interpretation of attitude reports. *Language* 90 3, 746–754.
- Zribi-Hertz, Anne (1989) Anaphor binding and narrative point of view: English reflexive pronouns in sentence and discourse. *Language*, 695–727.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計20件（うち査読付論文 18件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 18件）

1. 著者名 西垣内 泰介	4. 巻 27
2. 論文標題 「非飽和性」の不合理	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 トークス = Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin : 神戸松蔭女子学院大学研究紀要言語科学研究所篇	6. 最初と最後の頁 17~30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14946/0002000073	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西垣内 泰介	4. 巻 23
2. 論文標題 「指定文」の焦点要素	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本語文法	6. 最初と最後の頁 36~52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西垣内 泰介	4. 巻 26
2. 論文標題 「指定文」であるもの、ないもの	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 トークス = Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin : 神戸松蔭女子学院大学研究紀要言語科学研究所篇	6. 最初と最後の頁 33~47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14946/00002369	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西垣内 泰介	4. 巻 25
2. 論文標題 視点, モダリティと「人称制限」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin	6. 最初と最後の頁 67-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14946/00002320	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Taisuke Nishigauchi	4. 巻 23
2. 論文標題 Reason and Cause in the Specificational Sentence	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin	6. 最初と最後の頁 55-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14946/00002167	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西垣内 泰介	4. 巻 157
2. 論文標題 「潜伏疑問」の構造と派生	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『言語研究』	6. 最初と最後の頁 37-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11435/gengo.157.0_37	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西垣内 泰介	4. 巻 24
2. 論文標題 コーパスで何ができるか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin	6. 最初と最後の頁 45-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14946/00002248	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 郡司 隆男	4. 巻 23
2. 論文標題 隠された疑問	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin	6. 最初と最後の頁 13-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14946/00002164	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 郡司 隆男	4. 巻 24
2. 論文標題 華が娘で	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14946/00002246	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西垣内 泰介	4. 巻 157
2. 論文標題 「潜伏疑問」の構造と派生	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『言語研究』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11435/gengo.157.0_37	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Taisuke Nishigauchi	4. 巻 23
2. 論文標題 Reason and Cause in the Specificational Sentence	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin	6. 最初と最後の頁 55-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14946/00002167	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西垣内 泰介	4. 巻 19-1
2. 論文標題 「地図をたよりに」の構造と派生	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『日本語文法』(日本語文法学会機関誌)	6. 最初と最後の頁 37-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -



1. 著者名 Taisuke Nishigauchi	4. 巻 --
2. 論文標題 The Syntax behind the Concealed Question	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Proceedings of the Olomouc Linguistics Colloquium 2018	6. 最初と最後の頁 319-338
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 郡司 隆男	4. 巻 23
2. 論文標題 「半分」の意味論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin	6. 最初と最後の頁 15-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14946/00002082	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西垣内 泰介	4. 巻 22
2. 論文標題 「地図をたよりに」統語論・意味論の接点を探る	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin	6. 最初と最後の頁 59 - 74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14946/00002102	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西垣内 泰介	4. 巻 19
2. 論文標題 「地図をたよりに」の構造と派生	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語文法	6. 最初と最後の頁 37-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Taisuke Nishigauchi	4. 巻 なし
2. 論文標題 The Syntax behind the Concealed Question	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Proceedings of Olinco 2018 (The Olomouc Linguistics Colloquium, Palacky University, Czech)	6. 最初と最後の頁 109-128
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西垣内 泰介	4. 巻 21
2. 論文標題 「視点シフト」といわゆる「非飽和名詞」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin	6. 最初と最後の頁 151 - 169
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14946/00002026	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 郡司 隆男	4. 巻 22
2. 論文標題 「半分」の意味論	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin	6. 最初と最後の頁 15 - 23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14946/00002082	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 郡司 隆男	4. 巻 21
2. 論文標題 「お互い片思い」は両思い?	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin	6. 最初と最後の頁 11-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14946/00002019	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 西垣内 泰介
2. 発表標題 「理由」「原因」 視点現象への統語論的アプローチ
3. 学会等名 関西言語学会第48回大会シンポジウム 視点とモダリティ 因果関係を含む言語表現を中心に
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 西垣内 泰介
2. 発表標題 「理由」「原因」 --- 「視点」に関わる言語現象
3. 学会等名 KLS シンポジウム準備ミーティング・2023 年 2 月 21 日（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 西垣内 泰介
2. 発表標題 コーパスで見る e-mail, email, text(ing)
3. 学会等名 神戸松蔭女子学院大学言語科学研究所研究談話会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 西垣内 泰介
2. 発表標題 日本語と英語の「指定文」について
3. 学会等名 甲南英文学会（招待講演）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西垣内 泰介
2. 発表標題 「理由」「原因」を含む「指定文」と「視点投射」
3. 学会等名 大阪大学大学院文学研究科『土曜ことばの会』
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Taisuke Nishigauchi
2. 発表標題 Reason and Cause in perspective
3. 学会等名 Workshop "Logophoricity and perspectivization in Wackershofen" Stuttgart, Germany (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Taisuke Nishigauchi
2. 発表標題 The syntax behind the concealed question
3. 学会等名 Olinco 2018 (The Olomouc Linguistics Colloquium), Palacky University, Czech. (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	郡司 隆男  (Gunji Takao)  (10158892)	神戸松蔭女子学院大学・文学部・教授    (34513)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------